



Vol.34

コラム

日本のIT事情

デジタルの伝統

遠藤 諭

月刊アスキー 編集主幹
sato-e@ascii.co.jp

ヒッチハイクガイドとミュージアム

5月に10年ほどぶりにロンドンに行ってきた。

この原稿を書いている7月下旬には、地下鉄とバスの爆破事件で、ロンドン中心部の地図がテレビや新聞で何度も紹介されている。それによると、バスが爆破されたのは、私が宿泊した安宿の隣のブロックのようだ。見物して、買い物をして、食べ歩いて、映画を見て、偶然に古い友だちに遭遇することもできたオフだったのだが。

ロンドンで見た“映画”というのは、日本では9月10日からロードショウの『銀河ヒッチハイク・ガイド』(The Hitchhiker's Guide to the Galaxy)が、ちょうど公開となったところ。巨大なレスターシアターが、満杯の入りで、なおかつ湧きまくっている。要するに、本場英国の徹底的なおふざけとワピサピもある独特の空気を、肺の奥まで吸い込んでしまった。

この国のおふざけというのは、まったく筋金入りというが、生真面目な我々アジア人には想像もつかないレベルにある。『英語ことば遊び事典』(“The Oxford Guide to Word Games” Tony Augarde 著、新倉俊一監訳、大修館書店刊)には、19世紀にロンドン中で猛威をふるった“なぞなぞ”が、社会生活に支障をきたす段階にまで達していたというような話が出てくる。Queen Victoriaも、かなりの“なぞなぞ狂”だったそうだ。『イギリス式いたずらの天才』(“Almost Everything There Is To Know” 抄訳、Tim Hunkin 著、Peter Hui 訳、太田出版刊)という本は、私は、解説を書かせてもらっているのだが、まったく役に立たない“いたずら”が、これでもかと紹介されている(私が好きなのは“文字を裏返しに書かせるには?”というネタで、額に紙を当てて自分の名前を書いてねという、ほとんどの人は鏡文字状態で書くというもの)。そういえば、この本の著者も創立メンバーの1人だった自動人形小屋「キャバレー・メカニカル・シアター」というのがコベントガーデンにあっ

たのだが、数年前になくなったとのことで残念。

“見物”では、「サイエンスミュージアム」(The Science Museum)に初めて行った。地下鉄サウスケンジントン駅から歩いていくのだが、入場無料で撮影自由。“産業博物館”ともいえる側面もあり、なんといってもコンピュータ関連に割いているスペースが広い! 昨年暮れ、上野の国立科学博物館の新館グランドオープンで、ようやく日本最初のコンピュータといわれる「FUJIC」が常設展示となって喜んでいるのは大違いである。そのコンピュータの展示エリアに踏み込むと、まず驚くのは「階差機関」(Difference Engine)が、何台も展示されていること。なんだか、「モナリザ」の絵が何枚もあるような感覚に襲われるが、それだけ、機械工作が難しかったということだし、重厚な金属の塊だと知るだけでも目が覚められる。

「メカノ」(MECCANO)で作られた「微分解析機」(Differential Analyzer)の実物が見れたのも収穫だった。メカノというのは、ネジとナットを使う金属製のレゴのような組み立ておもちゃ。米国MITのVannevar Bushがありがたげに作った最新の装置を、HartreeとPorterという2人が、メカノで、たった20ポンドの予算で作ってしまったのだ。なんとも島国的なスケールの小ささで、私は、とっても好きなエピソードなのである。これを真似て世界中でいくつものメカノによる微分解析機が作られたというのも愉快的話ではないが。

誰も知らない携帯ゲーム機ギズモンド

“買い物”では、携帯ゲーム機の「ギズモンド」(GIZMONDO)を手に入れた。

ギズモンドといってもピンとこない人がほとんどだろう。ソニーの「PSP」や任天堂の「NINTENDO DS」と、ほぼ同時期に、まったく無名のベンチャーが携帯ゲーム機を発売しようとは、誰も予想していなかった。昨

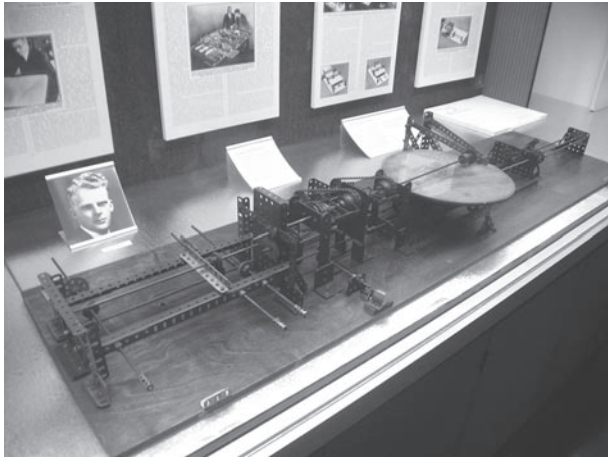


図-1 サイエンスミュージアムに展示されたメカノによる微分解析機。なお、金属製のメカノは、長らく入手できなかったが、ラジコンでお馴染みのニッコーがメカノ社と合併、100年記念の金属モデルが入手可能だ。



図-2 キズモンド。CPUは64bitのARM9 400MHz、OSがWindowsCE 4.2、グラフィックチップは128bit Goforce 3D 4500である。本体裏カバーを開けるとボーダフォンのSIMが入っている。

年10月に、英国だけで発売されたとされているのだが、私の周囲のガジェット好きな連中すらまだ誰も入手していない。ヨーロッパの主要国では6月19日、米国では8月11日に発売ということになっているのではあるが、

ロンドンには、有名玩具店のハムレイズがあるし、オックスフォードストリート沿いには大型ゲーム専門店もある。そして、トッテナムコートロード駅付近は、ヨーロッパでも有数の電気街として知られている。ところが、どの店のどのゲーム機売り場にもギズモンドの気配がない。10年ほど前にも、トッテナムコートロードで、「アルキメデス」(ARCHIMEDES)というパソコンを発見できずにあきらめたのを思い出した。それでも、今回は、なかばあきらめたところで、なんとロンドンの中心部、リージェントストリートのアップルストアの並びに、ギズモンドの専門店を発見した。

この携帯ゲーム機、私は、なぜそんなにこだわるのかということ、今年1月のCES (Consumer Electronics Show) で実物を見て、そのスペックが気になっていた。

1つは、携帯電話のネットワークにアクセスできること。音声通話ができないのだが、メールやメッセージング、オンラインゲームが可能となる。そして、小さい本体なのにGPSが組み込まれていて、地図ソフトが使えたり、位置情報を使ったリアルとバーチャルを融合したようなゲームも発売されている。ほかにも、ジャイロスコピック・デジタルカメラなんてキーワードがあったり、音楽や映像の再生機能もあったりする。どちらかということ、日本の携帯ゲーム機が、“オトナ”な感じであるのに対して、遠慮なくやってみようという機能を盛り込んでしまった感がある。そして、もう1つ、この製品で興味深いのは、ゲーム機のくせに、CPUもOSもグラ

フィックチップも、すべて買ってくれば揃うようなものだけで作られている。なにしろ、ソフトだってSDカードで提供されるのだ。これで、本体129ポンド(1ポンド=約200円)で売られている。

正直なところ、このゲーム機は、誰にも注目されないまま静かに市場から姿を消す可能性も高いと思う。しかし、私には、盛り込みたい機能をどんどん入れてしまったピュアなところが、キラキラして見えるのだ。ヒップホップ系の音楽や白と黒しか使わないイメージ戦略もよろしい。ちなみに、マイナーだと思っていたら、5月下旬のE3 (Electronics Entertainment Expo) で、米エレクトロニック・アーツや仏ユービーアイソフトなどのメジャーなゲームソフトメーカーが、ギズモンド向けにソフトを提供すると発表。マイクロソフトも、このゲーム機用に5本のゲームを発売するとアナウンスしている。果たしてどんなことになるのか、ちょっとぶり気になってしまうのである。

ところで、10年ほど前にトッテナムコートロードで見つけられずにあきらめた「アルキメデス」は、アーコン (Arcon) のRISC CPUをのせたパソコンで、実は、いまや携帯電話や小型端末の世界を席巻しまくっているARMプロセッサの始まりでなのでした。

(平成17年8月2日受付)

